



「神様のご計画に思いを馳せる」

2022年2月



河内長野教会牧師 森田 恭一郎

「主がお入り用なのです」

(マタイによる福音書21章3節)

今回のテーマは「主がお入り用です。神様のご計画があなたにも」です。

主イエスは「**主がお入り用なのです**」と弟子を通して子ろばの持ち主にお語りになりました。子ろばに乗ってエルサレムに入城するためです。戦争で用いる速くて強い軍馬ではありません。速く走れないズングリとしたろば、しかもまだ弱々しい子ろばです。子ろばをお用いになった理由を、マタイ福音書は旧約の預言書を引用してこう説明します。「**見よ、お前の王がお前の所においでになる、柔和な方で、ろばに乗り、荷を負うろばの子、子ろばに乗って**」(マタイ福音書21章5節。ゼカリヤ書9章9節)。エルサレムに入城なさる主イエスが柔和な方であることを示すためです。柔和、国語辞典では「優しく穏やかなさま、とげとげしくない、もの柔らかな様子」などと説明されますが、聖書では、他者の荷を負うさまです。この子ろばは見事に主イエスを証しました。人々は、十字架の主イエスを見ながら子ろばに乗られる姿を思い起こしました。今、人間の罪の重荷を負っておられるのだ、と。

軍馬とろばとどちらが格好良いですか？ 主イエスは子ろばを選ばれました。子ろばも持ち主も、主のお入り用とされて嬉しかったことでしょう。主イエスも十字架に向かうに当たり、子ろばに乗るのを喜びになりました。

聖書に「**容姿や背の高さに目を向けるな。人は目に映ることを見るが、主は心によって見る**」(サムエル記上16章7節)とあります。次期王様を選び出すにあたっての神様の言葉です。これは「人は外見じゃないよ、心だよ」ということではありません。この時の選びは周囲の予想と異なってダビデでした。まだほつぺたも赤い少年でした。外見も心も、所詮、人間は完全ではなく弱さを抱えています。人間の側の善し悪しではなく、神様のご計画をその人の心に置いておられる。それが「心によって見る」ということです。ここでは、次期王様にはダビデをお用いなるというご計画でした。

社会には社会の人物評価があるでしょう。成績の数字も評価の一つでしょうか。それと併せて、神様には神様の一人ひとりへのご計画があります。主がお入り用なのです、このことのためにあなたを用いよう、というご計画です。**あなたにご計画をお持ちの神様を信じ、神様に誠実に仕えて、神様があなたとその賜物を用いて下さるご計画の中に生きる。**学園で学びながら、あるいは受験に臨みながら、将来に向けての自分に対する神様のご計画に思いを馳せると、不思議でもあり楽しみでもあります。



「すべては光からはじまる」

2021年12月

中学宗教主事 川俣 茂

あなたがたはすべて光の子、昼の子だからです。

わたしたちは、夜にも暗闇にも属していません。

(テサロニケの信徒への手紙一 5章5節)

クリスマスを迎えるこの時期、街には「光」があふれています。都会の喧騒と光の渦に囲まれた世界が広がっています。クリスマス・ツリーに光をともしたり、ろうそくに火をともしたりします。このように光があふれているのは、ただ単に光がきれいだから、美しいからというのではなく、クリスマスにおいては「光」というものがとても大切な意味をもっているからこそ、「光」をとますのです。

* * *

と同時に、クリスマスの出来事、つまり主イエスの誕生は、人間の歴史の現実の中、いわば「闇」といつてもいい状況下で起こった出来事であると聖書は記しています。

* * *

現代では、夜でもネオンが光り輝き、闇などは少なくなったと感じられるかもしれません。しかし、街の明るさ、華やかさや物の豊かさとは対照的に人の心の中はすさんでいて、なお闇の中にいるといつてもいいでしょう。特にコロナ禍にある現代社会では、闇の中で希望を持たず、不安を抱きながらも自分を省みず、自分は悪くないと主張し、周囲に責任をなすりつける。自分でもどうしたらよいのかわからず、「希望の光」を見出せないで、悩み、苦しみ、この世をさまよってしまう、そのような現実、いや「闇」の部分が多くあるのもまた事実でしょう。

* * *

ヘロデという歴史上の人物が君臨していた時代、救い主の誕生、いや「ユダヤ人の王の誕生」を聞いた人々は不安を抱きました。博士たちが「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」と言って、エルサレムの街を情報収集に駆けずり回っている。そのことがヘロデ自身を、そしてエルサレムの住民を不安にさせた。自らの地位を脅かす存在に対するヘロデの不安、「ただでさえ面倒な為政者がまた出現するかもしれない」ことに対する住民たちの不安。共に先の見えない、闇に陥ってしまったような状況でした。そこでヘロデは祭司長や律法学者を一人残らず集めて調べさせ、占星術の学者たちに探しに行かせ、その場所を知らせようと命じました。表面的には「わたしも行って拝もう」と、神を畏れ敬う人間であるかのように見せかけてです。しかし実際のところは自分にとって邪魔な存在であれば権力を、そして武力を行使してまでも排除するつもりでした。いや、ヘロデは実際にベツレヘム周辺の2歳以下の男の子を皆殺しにしまいました。これがヘロデだけではなく、人間社会の現実です。人間の歴史はこの繰り返しだったといつてもよいでしょう。

* * *

そのような「闇」の中でのクリスマスの出来事。闇の中に「光」が現われました。クリスマスの「光」は消えてなくなることのない光です。その「光」とは何か。それは主イエス・キリストです。イエス・キリストの光は世の闇を一扫してしまうような大きな大きな光としては描かれていません。むしろ、闇にかき消されてしまうような、世の中の喧騒の中に埋もれてしまうような小さな小さな光として現われました。しかし、実はこの光からすべてが始まっていただけではなく、私たちもその光に照らされ、守られているのです。



「1<99が正解とは限らない」

2021年11月



中高校長 森野 章二

徴税人や罪人が皆、話を聞こうとしてイエスに近寄って来た。すると、ファリサイ派の人々や律法学者たちは、「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と不平を言いだした。そこで、イエスは次のたとえを話された。「あなたがたの中に、百匹の羊を持っている人がいて、その一匹を見失ったとすれば、九十九匹を野原に残して、見失った一匹を見つけ出すまで捜し回らないだろうか。そして、見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』と言うであろう。言うておくが、このように、悔い改める一人の罪人については、悔い改める必要のない九十九人の正しい人についてよりも大きな喜びが天にある。」

(ルカによる福音書15章1節～7節)

上記の聖書箇所は、有名な99匹の羊と1匹の羊のたとえです。この箇所について、私はこれまで色々な人たちから、質問や意見を頂いてきました。

「99匹を野原に残して、見失った1匹を捜し回るなんて、不合理じゃないですか？ その間、99匹は放っておかれるのでしょうか？ 狼に襲われたりしたらどうするのですか？」

「かわいそうかもしれませんが、見失った1匹はあきらめて、99匹を大切に守る方が良いと思います。もしかしたらその1匹は、自分が不注意で迷い出てしまったのかもしれませんが。それなら自己責任です。真面目に羊飼いの後について行っていた99匹がかわいそうではありませんか？」

中には、興味深い解釈をされる先生方もいらっしゃいました。「99匹の羊たちは、たった1匹の仲間を捜しに出かける羊飼いの背中を見て育つのです。だから、教育論として、このたとえ話は正しいと言えます。」

いずれも、当然の疑問であり、もっともなご意見です。常識的な考えだろうと思います。しかし、一点だけ言えるとしたら、どの方も自分自身を羊飼いの立場や99匹の立場に置いて、あるいは傍観している第三者として考えておられる、ということです。

もし自分がこの1匹の羊であったとしたら。群れからはぐれ、羊飼いから離れて、自分がどこにいるのかも分からない。不安と心細さと恐れでいっぱい。喉はカラカラ、おなかはペコペコ。足は痛いしあたりはどんどん暗く、寒くなって行く。遠くから狼の遠吠えが聞こえてくる。泣きそうでもロボロボの自分。そんな自分を、99匹を野原に残してでも探しに来てくれた羊飼い。その姿を見た途端、きっと、その胸に飛び込んで、抱きついて、大泣きしながら感謝するのではないかと思います。

(次ページに続く)



聖書は、聖い神様の前では、私たち人間は一人残らず罪人である、と教えます。神様から離れて自分勝手な道を歩んでいる罪人。つまり、私たちは全員、この1匹の羊である、と語るのです。そんな失われた羊である私たちを救うために、イエスキリストが十字架にかかられた、というのが聖書の中心メッセージです。「悔い改める必要のない九十九人の正しい人」など、最初からいないのです。

しかし、それなら何故、イエスはそのような存在しない「正しい人」のことに言及されたのでしょうか。その答は、イエスがこのたとえ話を始められたきっかけにあります。今回の聖書テキストの冒頭部分です。当時一般市民から嫌われていた徴税人や罪人たちをイエスは迎え入れて、食事まで一緒にしていました。そんなイエスをファリサイ派の人々や律法学者たちは批判しました。「この人は罪人たちを迎えて、食事まで一緒にしている」と。恐らく彼らは、自分たちはこんな連中とは違う、悔い改める必要のない正しい人だ、と考えていたのでしょう。あいつらは悪い奴。俺たちは正しい。しかし、そんな彼らは、「不平を言いました」と書かれています。自分だけが正しい、相手は間違っている、という立ち位置にいと、感謝の心が消えて、不平・不満が湧いてきます。自分のことを棚に上げて、他者への批判ばかりが出てきます。

一方、自己責任であろうと何であろうと関係なく、いなくなった1匹の羊を見つけ出すまで捜し回り、「見つけたら、喜んでその羊を担いで、家に帰り、友達や近所の人々を呼び集めて、『見失った羊を見つけたので、一緒に喜んでください』」と大喜びする羊飼いです。何と対照的な姿でしょう。そのことに気付かせること、それが、イエスがこのたとえ話を話された理由の一つではないかと思えます。あなたたちが批判しようと、差別しようと、この人たちは神様の目には大切に尊い存在なのだ、と。彼らを受け入れず攻撃しているあなたたちもまた、罪人であり、救いの必要な1匹の羊なのだ、と。そして、あなたたちがそのことに気付いて助けを求めるなら、羊飼いはあなたたちをも救うために、野を越え山を越えて、見つけ出すまで捜しに来てくださるのだ、と。

昨今ネット上では、「炎上」という言葉が表すように、他人のことを批判し、非難する論調が目立ちます。それぞれの人は、正義感から意見を発しているのかもしれませんが。また、その意見の多くは、ある意味「正論」とも取れるものです。非難している内容は当たっているのかもしれませんが。しかし、他者を批判している自分もまた、失われた1匹の羊であり、神様の憐れみと許し、救いの必要な罪人であることを自覚する時、湧きあがってくるのは批判や非難ではなく羊飼いへの感謝であり、自分を探し回り、見つけ出してくださった方への賛美であるはずなのです。

他人を批判し、非難し、攻撃することに多くの時間とエネルギーが割かれる現代の風潮は、私たちの心を疲弊させ、何も良いものを産み出しません。神様の赦しと救いの恵みを伝える聖書のメッセージがいつの時代にも必要とされる所以です。

「東京2020に想う澤田啓祐先生のこと」

理事長・チャプレン 井上 良作



兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていません。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。

(フィリピの信徒への手紙3章12～14節)

2021年夏、新型コロナウイルスの感染拡大によって1年延期された東京五輪・パラリンピックが開催され、大会前の様々な懸念にもかかわらず、多くの感動を生んで無事閉幕されました。東京は夏季パラリンピック大会が2度開催される世界で初めての都市となりました。パラリンピック閉会式取材した海外メディアの記者たちは、「障害のある歌手が唄う『この素晴らしき世界』に感動した。コロナ禍の世界に一筋の希望を感じさせた」、「日本文化や多様性を感じる温かい内容。共生社会を体現した」、「全会場に多くの通訳がいて言葉が通じない選手にも取材できた」、「ボランティアの働きぶりは称賛に値する」、「(感染対策について)大会中はずっと安全だった。東京到着前は想像できなかった」と口々に高い評価を報じました。しかし、ある盲目のブラジル人カメラマンは「会場周辺は段差が多く点字ブロックのない場所もあり、ボランティアが手伝う場面が目立った。助けがなくても障害者が過ごしやすい街が理想。改善が必要と感じた」と課題も指摘していました。そして、国際パラリンピック委員会(IPC)のパーソンズ会長は「We love you, Japan!」と声を張り上げて閉会を宣言し、「新型コロナ禍を考えると、日本が行ったような大会開催は諸外国ではできなかったと確信している。世界は日本が果たした役割を決して忘れない」と述べました。これらが国際社会を代表する、東京2020に対しての評価の声でありました。

これらのことは医療現場で働く人々の多大な犠牲と貢献と、日本社会のすべてにおいて感染拡大を防ぐために人々が努力したことがあって実現したことだと思えます。昨年度から学校生活は大きく変わりました。たくさん学校の行事や部活動の大会等を諦めなくてはなりませんでしたが、通常の授業までも様々な制限が課せられてきました。しかし、私たちはただ単に我慢を強制されて過ごしてきたのではなく、こうして国際社会から高く評価され本当に感謝される結果にも繋がったのだということを東京2020の記憶として留めたいと私は考えます。

パラリンピックの発祥は、英国の神経外科医だったルートヴィヒ・グトマン医師が1984年にロンドン郊外のストーク・マンデビル病院で開いたアーチェリー大会だとされています。聖書を知るユダヤ人であるグトマン医師は、第二次大戦中に負傷し車椅子生活となった退役軍人らに「失ったものを悔やむよりも、今あるものを最大限に生かすことにフォーカスしよう!」と励ましてスポーツによるリハビリテーションを勧めたのでした。パラリンピックを生み出すモットーとなったこの言葉は、今月の聖句として挙げた新約聖書の使徒パウロの言

(次ページに続く)

葉が教えている聖書の人生観から来ているものでしょう。このストーク・マンデビル病院に日本から留学していた中村裕医師は、障害者が活発にスポーツに取り組む生き生きとしている様を見て衝撃を受けました。当時の日本では障害者は病院でひたすら安静にして看病されるだけの存在でしたが、そこでは全く違っていただけです。中村医師はこれを日本に導入することを使命として働き、ついには1964年の東京五輪で第2回パラリンピックが開催されたのです。

今年、清教学園は創立70周年を記念しています。1951年4月に清教学園中学校が河内長野に開校しました。そこに至る創立の歴史を、生徒のみなさんは大谷美和子さん著の小説『青春輪舞—清教学園物語』で読み知っているでしょう。主人公の清教塾教師、山村耕平は清教学園創立者の中山昇先生であることも

知っていると思います。今回は、もう一人の主人公と呼んでよい、清教塾生で中学校設立運動のリーダーであった田川誠少年のことをお話します。田川少年はその後、どんな大人になったのでしょうか？



少年時代の澤田先生



晩年の澤田先生

田川誠のモデルとなった澤田啓祐さんは河内長野・高向の村で育ちました。中学校設立運動の中心でしたが、学校ができた頃にはすでに高校生となっていて自身は清教学園の生徒となることはできませんでした。少年時代、村で大怪我をして困っている人を見て医師になることを志しました。そして、最新の手術を追求する整形外科医として医療現場の第一線で活躍されました。しかし、40代になった頃、日本の、とりわけ大阪府の障害者福祉行政が立ち遅れていた事態を目の当たりにして、澤田啓祐先生は最先端の整形外科医の立場を惜しむこと無く、障害者福祉行政に働き場を変えました。とても快活な先生は障害者の方々を大勢海外旅行に連れて行くなどして、福祉行政に大きな変革をもたらす先駆的な働きをされました。1964年の東京パラリンピック大会開催の原動力となった中村裕医師と理念や情熱を同じくしていたのが、澤田啓祐先生でした。

大阪府福祉行政から退かれた後には、清教学園理事長として学園教育をリードされました。大変残念なことに病に倒られました。河内長野教会で営まれたご葬儀には数千人の参列者が、その中には障害者の方々もたくさん集まってきました。その光景は、先生がいかに多くの人々に影響を与え慕われていたかを現していました。

「賜物を生かして互いに仕える」という学園教育のモットーは、無いことできないことを悔やんだり嘆いたり羨んだりする生き方ではなく、「神様は確かに賜物を与えてくださっている」と感謝して受け入れて、自分にできることを周りの人の幸せに貢献するためにすすんで用いていくスピリットであります。このスピリットを澤田啓祐少年から始まって学園の門をくぐったみなさんすべてが受け継いでいるのです。みなさんが与えられた賜物を一つでも多く見出し磨き合っていく青春時代をこのキャンパスで過ごしていただくこと、それが創立から変わらぬ清教学園の願いです。

「信仰の火に思いを寄せる」

2021年9月

中山 昇
(1925～2019)



しかし彼自身は、火の中をくぐってきた者のようにではあるが、
救われるであろう。

(コリント人への第一の手紙 3章15節より:日本聖書協会1954年改訳版)

昭和の戦争の時代、私の属する河内長野教会は、伝道教会の中でも最小の一つで、礼拝に集う信徒は10人に満たず、自立もままならぬ状態でした。浪花中会⁽¹⁾では、教会名の「河南(カナン)教会」をもじって、「カナワン教会」と呼ばれていました。「カナワン」とは「厄介な」とか「困った」を強調する、この地域の俗語であります。

その教会が、戦後、姿を変えられていきました。私たちはその後の教会の歩みの中に人間の思いや努力を超えた、神様の御手の業を目の当たりにさせていただきました。

神様は人の思いに、不思議と見えることを起こしてくださいます。私は日本基督教団河内長野教会の一信徒として、学校法人清教学園中学校の創立に、参加させて頂いたことで、主のお導きをつぶさに体験させていただいたものの一人であります。当時河内長野教会の会員は20人ばかりで、教会学校の中高生の30人が夜の清教塾⁽²⁾に参集していました。それは、戦後の教育に挑戦する若き同志としての中高生の集いでありました。全員が集まれば、入り切れないような田舎の小さな教会の群れであるのに、自分たちの中学校が欲しいと言い出したのです。無一物で、頼るべきはただ先立ちたまう神様のお力のみという状況の中で、御言葉によって養っていただきました。

神から賜った恵みによって、わたしは熟練した建築師のように、土台をすえた。そして他の人がその上に家を建てるのである。しかし、どういうふうに住てるか、それぞれ気をつけるがよい。なぜなら、すでにすえられている土台以外のものをすえることは、だれにもできない。そして、この土台はイエス・キリストである。この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、または、わらを用いて建てるならば、それぞれの仕事は、はっきりとわかってくる。すなわち、かの日は火の中に現れてそれを明らかにし、またその火はそれぞれの仕事が多様なものであるかを、ためすであろう。もしある人の建てた仕事そのまま残れば、その人は報酬を受けるが、その仕事が焼けてしまえば、損失を被るであろう。しかし彼自身は、火の中をくぐってきた者のようにはあるが、救われるであろう。

(コリント人への第一の手紙 3章10～15節)

建設運動⁽³⁾が全く五里霧中の中で、私たちの拠り所は、神様がどんな道を開いてくださるのか、それを尋ね、祈りながら、働かせて頂くことでありました。不安で、不安でたまらないことも、しばしばありました。その日々はまさに火の中をくぐり続けながら、「神様、今日は何をお示しくださるのでしょうか」と問いつつ、聖書の学びを共にさせて頂く一歩一歩でありました。

神様は無一物の群れに、思いもかけぬ土地を備え、思いに勝る校舎を建築させ、思いがけぬ人材を整えてくださいました。そして、気がつくとも中学校開校の日までに要した日数は僅かに1年と3ヶ月でありました。

(次ページに続く)



その賜物を生かして
互いに仕えよう
中山昇

それから61年⁽⁴⁾、今年の中、高、幼稚園を合わせて2,400人の園児、生徒が通う学校にまで成長させてくださいましたが、火の中をくぐっていることには、いささかも変わりはありません。信仰を問われる試練は神様から投げかけていただく火です。底には救いの約束が土台に据えられています。この御言葉に導かれる信仰を、大切に継承してゆきたいと祈ります。

※ 2021年9月の「今月の聖句」では、創立70周年を迎え、学園創立に携わった者たちを支えた聖句を改めて覚えさせていただく機会を持つことにしたい。

出典：『希望のみなもと—わたしを支えた聖書のことば』（船本弘毅 編、燦葉出版社、2012年）

P.334～P.337より *表現の一部を法人事務局により校訂 *燦葉出版社によるご承諾をいただき掲載

※ 中山 昇(なかやま のぼる、1925年7月18日～2019年11月11日)

1925年 河内長野生まれ。1945年8月に津山予備士官学校で敗戦を迎え、大阪第一師範に復学。清教学園の創立に教会学校の生徒たちと共に携わり、清教学園中学校・高等学校の教諭、教頭、校長、理事長、名誉理事を歴任し、2019年11月11日に94歳で天に召されるまで、キリスト者としての信仰と清教学園の教育振興に自らを捧げる生涯を歩んだ。

【註】(1)浪花中会:

それぞれの教会の長老会議を小会、複数の教会から代議員が派遣されて開催される長老会議を中会、さらに広範囲になる長老会議を大会という。なお、河内長野教会の前身である長野講義所は1905年7月18日に創立され、その後の1910年10月、長野・富田林両講義所を合わせた河南教会として浪花中会にて承認された。

(2)清教塾:

清教学園の前身となった河内長野教会の教会学校(日曜学校)。1948年4月15日に中学生を中心とする23名が集って開塾。「基督教主義を教育の基盤とし、己を知り、隣人に仕え、国を愛し、世界を友とし、神に帰一せんとする人格を養う」、「知識の水準を高め、自主的学究の補導をなす」という二大原則を掲げ、清教学園設立に至るまでの間、週間の毎夜、主に中学生が集い、聖書と教科の学習、また夢を語り合う対話が重ねられた。

(3)建設運動:

1949年12月に清教塾の塾生たちが立ち上がり行った「すくど(松の落葉)拾い」の売り上げ770円は、清教学園設立の初穂となった。キリスト教を土台に据えた学校の必要性に突き動かされた多くの人々の想いのもと、清教学園中学校の創立を目指す運動が起こされた。

(4)61年:

この文章は、2012年、東日本大震災(2011年)により人々が深い悲しみと苦しみに苛まれていた中、学園60余年の歩みを通じて示していただいた神様の恵みを振り返りつつ、私たちはいかなる中にも信仰によって尽きせぬ希望にあずからせていただくことができるということを証したメッセージである。

「見えないものに目を注ぐ」

2021年8月

中学教頭 慎 繁範

それから、トマスに言われた。「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。」トマスは答えて、「わたしの主、わたしの神よ」と言った。イエスはトマスに言われた。「わたしを見たから信じたのか。見えないのに信じる人は、幸いである。」
(ヨハネによる福音書 20章 27～29節)

キリスト教信仰は、復活した主イエスを信じます。イエスは十字架に架けられる前、ご自身の弟子たちに自分は死んで3日目によみがえると予言していました。それなのに、どの福音書にも主イエスの復活を信じられなかった弟子たちのことが記されています。上掲のヨハネによる福音書も同様で、トマスは十二弟子の1人でありながら、復活の主イエスを信じるできませんでした。25節に「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」とあります。それゆえトマスは弟子の中でも、疑い深いトマスと揶揄されています。

人間の五感(視覚・聴覚・触覚・嗅覚・味覚)のうち、視覚は最も大きな影響を我々に与えています。『百聞は一見に如かず』といいますが、人間が外界から受け取る情報のうち、8割が視覚によるものであると言われていいます。それゆえに、見えるものこそが重要と考えるのも当然と言えるのではないのでしょうか。昨今、スマートフォンやSNSが普及し、いつでもどこでも他人の撮った風景や食べ物などの映像が見られるようになりました。インスタ映えに代表されるように、見た目重視の傾向は加速しているように思えます。『人は見た目が9割』という本も流行しました。他人からよく見られたいという欲求は常に私たちの中に存在していると思います。

実は、ものが見える仕組みはこうなっています。そこにりんごがあると見るためには、まず光がなくてはなりません。太陽や蛍光灯、LEDといった光源から出た光がりんごにあたって反射し、私たちの目に入り、網膜上の視神経を刺激して脳に送られ、りんごと認識されるわけです。スマートフォン上に画像が表示されるのは、スマートフォンのディスプレイ上に無数の光源があって、そこから出た光を見ているのです。光源がなければ見えませんし、脳内で画像を認識する作業が加わるので、本来の姿とは違う認識をされることもよくあります。実は、視覚はとてもいい加減なものなのです。

物事の本質、本当に大事なことは、実は見えないものの中にあることが多いのではないのでしょうか。『わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです』(コリントの信徒への手紙Ⅱ4章18節) わたしたちも、容姿とかSNS映えといった、見えるものを追求するのではなく、見えないものに価値を置いて生きていく人になりましょう。『見えないものに目を注ぐ』という表現は矛盾しているようですが、見えないものを信じてと換言できます。そして、見えないものを信じるときに、それが見えるようになってくるのです。そもそも信仰とはそのようなものなのです。

『信仰は望んでいる事からを保証し、目に見えないものを確信させるものです。昔の人たちは、この信仰のゆえに神に認められました。信仰によって、私たちは、この世界が神のことばで造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです』(ヘブライ人への手紙11章1～3節)

「はじめに夢があった」

2021年7月

中学宗教主事 川俣 茂

その後

わたしはすべての人にわが霊を注ぐ。

あなたたちの息子や娘は預言し

老人は夢を見、若者は幻を見る。 (ヨエル書3章1節)

「はじめに夢があった。教会の中に夢があった。教会の環境に於いて教育ができればどんなによいだろうと、

何人もの先輩がこの夢を懐きつつ、どれも実現しないで天に召されていった。」

これは1951年4月6日、清教学園中学校開校式での初代理事長、橋本通先生(日本基督教団河内長野教会牧師)の式辞の一部です。

清教学園のはじまりには「夢」がありました。戦争が終わった直後で、何もない状況ではありましたが、皆、「夢」を持っていました。その「夢」は、「教会の中」で抱かれた「夢」であり、具体的には「教会の環境に於いて教育ができれば」というものでした。多くの「夢」がそうであったように、「夢」で終わってしまうのではないかと思うような時がしばらく続きましたが、それでもその「夢」を捨ててしまうことはなく、いつか「実現する」と信じていました。

この「夢」を抱いたのは、教会に集う人々、大人だけではなくありませんでした。清教学園の前身である「清教塾」に集まっていた中学生を中心とする塾生たちも同じ「夢」を抱いていました。「自分たちの学校が欲しい」「キリスト教に基づいた学校が、今のこの時代、この河内長野の地に必要だ」という「夢」。この「夢」の実現のために、塾生たちは「自分たちにできることは何だろう」「自分たちだからこそできることは何だろう」と皆で考え、そして行動に移しました。それが「すくどかき」と呼ばれる出来事です。皆で議論し、プランを練っていくことも重要です。しかし塾生たちは「机上の空論」ではダメだということに気づいたからこそ、行動に移しました。この行動こそが、それまでは「夢」にすぎなかったものが、「学園創立」という「夢の実現」に向けた第一歩となったのです。その結果、ささげられたのは770円(現在の貨幣価値に換算すると20,000円くらいになるのでしょうか)。わずかな金額かもしれませんが、学園創立にとってはとても貴重な金額だったといえるでしょう。

この「夢」が1951年に実現してから、70年の歳月が流れました。「もう無理だ」「実現なんかするはずがない」と思うのではなく、清教塾の塾生たちのように、実現することを神に祈り願いつつ過ごしてきた結果です。時間を無駄に過ごしてしまうことなく、自分たちで自分たちに限界を決めてしまうのではなく、「夢の実現」に向けて、自分たちでできることをしていった結果です。

「夢」を持つことはとても大切なことですが、その「夢」を実現できるかどうかは、あなたの行動力にかかっているといえます。清教学園は1951年の創立以後も、数々の「夢」を抱いてきました。実現しなかった「夢」もあるかもしれません。しかしここに清教学園が存在し、70年の歴史を刻んできたことも事実です。存在と歴史がすべてを物語っているといえるでしょう。

もう一つ清教学園の歴史を顧みた時、清教学園だからこそ「夢」の実現に向けて力強く歩むことができた理由があります。それは神の存在です。「夢の実現」に向けて、自分たちでできることをする、その背後には多くの「祈り」がありました。神を信じ、神に信頼した人々の姿がありました。清教学園は「祈りによってできた学校」、「清教の歴史は祈りの歴史」とよく言われます。前身の清教塾でも、清教学園でも「祈り」を大切にしてきました。祈りつつ、「夢」の実現に向けて仲間と共に歩みを進める、そしてその「夢」が実現したら、仲間と共に喜ぶ。学園の歴史はこの繰り返しでした。その歴史に触れることができ、またその歴史をともに担うことができる、それが清教学園で学ぶ醍醐味の一つだと思います。

さあ、あなたはどのような「夢」を抱き、どう考え、どう行動しますか。

「向こう岸に渡ろう」

2021年6月

校長 森野 章二

その日の夕方になって、イエスは、「向こう岸に渡ろう」と弟子たちに言われた。そこで、弟子たちは群衆を後に残し、イエスを舟に乗せたまま漕ぎ出した。ほかの舟も一緒であった。激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水浸しになるほどであった。しかし、イエスは艫の方で枕をして眠っておられた。弟子たちはイエスを起こして、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」と言った。イエスは起き上がって、風を叱り、湖に、「黙れ。静まれ」と言われた。すると、風はやみ、すっかり凪になった。イエスは言われた。「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか。」弟子たちは非常に恐れて、「いったい、この方はどなたなのだろう。風や湖さえも従うではないか」と互いに言った。一行は、湖の向こう岸にあるゲラサ人の地方に着いた。 (マルコによる福音書4章35節～5章1節)

イエスの弟子達は湖で嵐に遭遇した時、「何故こんな目に遭うのだ、イエス様の指示に従って船をこぎ出したのに」と不平不満や疑いが出てきたかもしれません。実際彼らは、「先生、わたしたちがおぼれてもかまわないのですか」とイエスに文句を言っています。しかし、一行は最終的には目的地である向こう岸に無事到着しました。しかも、自分たちの先生には嵐を静める力まであることを目の前で体験する、という大きなオマケつきで。

清教学園に入学した一人ひとは、神様によって導かれて入学した生徒であると私たちは考えています。そして、一人ひとりに到達すべき目的地が与えられているのだと信じています。途中、色々な嵐が訪れるかもしれません。神様が導いてくれたのなら、何故こんなことが起こるのだ!と叫びたくなるような嵐、試練が来るかもしれません。しかし、弟子達が無事に目的地に到着したように、私たちも目的地に到達できるのです。そして、嵐が来たからこそ経験できた素晴らしい体験、人間としての成長という大きなオマケがつくことでしょう。

コロナ禍の不安、色々な制限。希望が持てず、やる気が出ないという人はいるでしょうか。その人は、今が嵐の真っ只中なのかもしれません。神様が共にいてくださるので、船が沈んでしまうことはありません。嵐の過ぎ去った後、目指していた目的地に到達できることを信じて、そしてひと回り成長した自分を発見できることを期待して、一步一步前に進んで行けるように祈っています。

私は若い頃、痛い経験をしたことがあります。まだ車の運転にも慣れていなかった時期、教会の牧師に頼まれて、何人かのゲストを迎えに行きました。ハワイから来られたミュージシャン3人で、この人たちは音楽を通してキリスト教を伝える音楽宣教師のような働きをしていました。その人たちを招いて教会でコンサートを開く計画で、車で1時間ほどの宿舎まで迎えに行きました。

(次ページに続く)

車の運転に慣れていないことと、道が分からない初めての場所であったこともあり、友人に付き添ってもらいました。当時はカーナビもスマホもありません。その友人は、あの宿舎なら何度も行ったことがあるから大丈夫、まかせとけ。という感じで、私も完全に頼りにしていました。

ところが、30分程走ったところで、友人の様子がおかしくなりました。「あれ～、おかしいなあ…。」どうやら道順の記憶が不確かであったようで、やっと宿舎に着いた時には、コンサート開始まで1時間あるかないかというきわどい時間でした。宿舎で待っていた世話役の方は、イライラした気持ちを抑えて、時計を見ながら、「このタイミングでは、少し遅れるのはもう仕方ないから、慌てずに確実に教会まで連れて行ってあげてください。」と仰いました。

ゲストを車に乗せ、走り出したのは良いのですが、来る時グルグル回ってやっと宿舎に着いたので、帰り道が全然分かりません。友人もお手上げ状態。仕方なく、感覚を頼りにとにかく車を走らせました。時計はどんどん過ぎていきますが、どこを走っているのか全く分からない状態です。かなり焦りながら、コンサートの開始時間、30分遅れくらいですむかなあ、などと計算していました。

でたらめに走っているうちに、見当違いの方向に来てしまっていることだけが分かりました。しかしどっちへ行けば良いのか、道は分かりません。ついには、乗る予定のなかった高速道路に、いつの間にか入ってしまいました。神戸方面直進とか、奈良方面右方向とか、信じられないような表示が出ています。「一体どこまで行ってしまおうだろう。コンサートはもう中止かな。どうやって責任取ろう。」などと半分やけくそになっていたところ、前の方の行き先表示板に、馴染みのある地名が書いてありました。教会のある場所です。「まさか」と思いながら表示の方向にハンドルを切って、しばらく走ると高速の出口が見えました。出口を出ると、教会のすぐ近くがよく知っている道路に出ました。

わけもわからず走っているうちに、目的地の方へ導かれていたようです。何とコンサート開始の約15分前に教会に到着し、少し休憩をしてコンサート開始、という驚くべき結末となりました。

不思議な体験を自慢したいのではありません。また、私の取った行動は、決して誉められるものではありません。大切なゲストを迎えに行くというのに、非常に無責任な姿勢です。それでも敢えて、いい加減な自分の恥ずかしい体験を共有させて頂きました。それは、神様の導きを受けて進み出す時、途中で色々な嵐、試練、失敗など、たいへんなことが起こって、本当に大丈夫なのかなあと思われるようなことがあったとしても、神様の助けを頂きつつ前へ進み続けるならば、最終的には目的地に到着できる、目的を果たすことができる、ということをお伝えしたかったからです（ただし、皆さんはどこかへ出かける時にはきちんと地図を確認しておいてくださいね）。

コロナ禍が皆さんの大切な学園生活を台無しにしてしまうようなことを許さず、定められた目的地に向かって一步一步前進して行く毎日でありますように。



「しらかしの^{みち}径」を歩くということ

2021年5月



法人事務局 川畑 さとみ

忍耐は練達を、練達は希望を生むということを

(ローマの信徒への手紙5章4節)

これは、河内長野駅よりの通学路「しらかしの径」の入口にあるアーチの裏面に刻まれている聖句です。「endurance忍耐」、「character練達」、「hope希望」という3つのロゴが、木々に囲まれた緑の中で一際目立ちます。



「しらかしの径」と聞けば、高原をイメージしたのどかな散歩道を連想される方が多いかと思いますが、実際に歩いてみると、山登りさながらの登り坂や階段が続きます。眼下に天見川を見下ろし、川面に野鳥の姿も見られるのですが、そんな景色など目に映らず、ただただ下を向いて汗だくになりながら学校を目指さなくてはなりません。



しかし、生徒たちはこのようなきつい坂道を毎日登っても、「また明日、学校に来たい」と言います。それは、学校に着けば、友達に会える、語ることができる、共に勉強するモチベーションも上げることができる。だから、学校は楽しい、学校に行きたいと思うからだそうです。そして、しらかしの径を登りきると、毎朝、校長先生の笑顔と元気な挨拶が出迎えてくれます。

さて、この上に挙げた聖句は、次のように続きます。

希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。 (ローマの信徒への手紙5章5節)

イエス・キリストは、すべての人、とりわけ身分の低い人、病に苦しむ弱い人にも目をとめられ、その深い愛を注がれました。もちろんその愛は、私たちにも注がれています。

毎朝「しらかしの径」の坂道を登る時、忍耐、練達、希望へと必ず繋がると考えれば、少し足どりも軽くなり、帰りの下り坂を降りる時に絶景の夕日と出会えば、神様の愛を感じ満喫した一日になることでしょう。



「賜物を生かして互いに仕える」

理事長・チャプレン 井上 良作

あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。

(ペトロの手紙一 4章10節)

清教学園中学校・高等学校に入学された新入生のみなさん、ようこそ清教学園へ。上級生に進級した2・3年生のみなさん、短い春休みを終えていよいよ新学期です。新しい制服を身にまとい、新しい教室に入り、新しい仲間と出会い、気分一新して学園生活が始まります。

2021(令和3)年、清教学園は創立70周年の記念すべき年を迎えました。

1951(昭和26)年、大阪の南端、金剛山麓の農村であった河内長野に清教学園中学校が誕生しました。日本のキリスト教主義私学の多くはミッション・スクールと呼ばれ、欧米宣教団体の豊富な資力を背景にしてできた学校です。清教学園は日本基督教団大阪長野教会(現・河内長野教会)という一つの地域教会の教育活動である「清教塾」という小中学生たちのグループによる中学校設立運動から生まれました。1945(昭和20)年の敗戦による荒廃の中で生きていた当時の小中学生たちは、国破れてもなお生きるに甲斐ある人生があるのか、何が永遠に滅びないものかを懸命に探し求め、神様に真剣に祈り、学び、働きました。若者たちの真摯な姿は教会や地域の人々、国内の有力者や海外の教会の人々の心に響き、援助の手が差し伸べられ、ついに清教学園は誕生したのです。現代で云うクラウドファンディング・ビジネスのようなものも全くない時代にこのようなことが実現することは、私たちの想像を超えるような奇跡的な体験であったことと思います。神様は生きておられて、真剣に祈り行動する者の夢を叶えてくださるのだと思います。

今年度の学園聖句・標語は、清教学園の先輩たちが創立の時からモットーとしている教育理念を表しています。『あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから』、創造主である神様は私たちすべてのひとり一人を善い者として、最高傑作品として造りました。みなさんはありのままに創造主に愛され望まれて生きています。ですから、人に気に入られるための努力は必要ではなく、努力は自分の周りを照らすために用いるのです。それが『神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。』という言葉の意味です。みなさんには善い賜物が授かっている(一つではない)ことを覚えてください。そして、それを見出し、磨き、今日と明日に生かす青春時代を大いに楽しんでいただきたいと思います。それこそがこの学園を汗を流し作った人々の願いであることを覚えていただきたいと思います。

「あなたは誰と涙を流しますか？」

2021年3月

高校宗教主事 土井 直彦

喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい。

(ローマの信徒への手紙12章15節)

3月は卒業の時期であり、次なる「出会い」に備える時でもあります。本年は歴史的にも大きな出来事とも言えるコロナウィルスの影響で、学校の行事や式典も延期や中止、規模の縮小が求められました。それは本校だけでなく、世界的な規模で求められる事柄でした。

日常生活が制限されるそんな中でも、清教学園では幼稚園・中学・高等学校とそれぞれができる工夫を行い、一年を過ごしてきました。

特にこれからこの学舎を卒業していく第51期の高校3年生に対しては、自分たちの新しい「生きるべき場所」でも、神さまの守りと導きがこれからも続きますようにと切に祈るばかりです。

さて、清教学園はその歴史を紐解くと戦後の荒廃の時にあって、キリストの教えを土台とした新しい教育の形を求める若い人々の想いによって誕生した学校です。資金も機会も、方法すら乏しかった中で、彼らが求めたのは「キリストによる平和」です。そして、それは本校の「目指す人間像」として、現在も本学園の教育の指針となっています。

今月の聖句は、ローマの信徒への手紙15章にある「キリスト教的生活の規範」からの抜粋です。聖書は私たちがどのように生活するかを様々に示す中で、シンプルに「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」と示しています。それは、誰かの喜ぶことを為していくことでもなく、泣く人に慰めを与えることでもありません。どちらかがどちらかに「してあげる」のではなく、共に心を近づけ、想いを分かち合うこと、その時に心から沸き上がることを大切にしたいことを求めています。

戦乱の荒廃から立ち上がることから動き出した清教学園の始まりは、隣人、隣国と手を携えて歩むことを求めています。

一年の区切りを迎える3月に、これまでをふり返り、自分が誰と共に歩んできたのか、またこれからは誰と共に歩んでいこうとするのか深く考え、想起する時としたいと思います。

「神が準備してくださる“道”」

2021年2月

中学宗教主事 川俣 茂

主はこう言われる。

「さまざまな道に立って、眺めよ。昔からの道に問いかけてみよ
どれが、幸いに至る道か、と。その道を歩み、魂に安らぎを得よ。」

(エレミヤ書6章16節)

私たち一人ひとり、それぞれに「道」があります。すぐくまっすぐな、それこそ一直線の道の人もいれば、道がありそうで実はなかなか道が見えない人もいるかもしれません。私自身、ふり返って考えてみても、それまで歩いてきた「道」は、時には細くなったり、時にはすごい回り道をしたり、あるいは道なき道だったりといろいろな状態でしたが、よく見てみると、一本の道となっていました。

不思議なことに、みな、それぞれの「道」を歩いてきています。自分が道を作ったわけでもないし、道があると思って歩いていったわけでもない。ただ、毎日なんとなく過ごしていたらこういうことになっていた。一本の道になっていたのです。さらに不思議なことに、その道ではなかったら、その道を歩いていなかったら(実際にそういうことはありえないでしょうが)、私たちの人生はどうなっていたのでしょうか。今の「私」はなかったといえるでしょう。

これまでは何かとあわただしい日々を送ってきたこともあり、「そんなことを考えたこともなかった」かもしれません。でも、どうして私たちは今ここにいるのでしょうか。そしてこれから先は…?

昨日も今日も明日も、毎日毎日過ごしていくことで、道ができていく。「自分が道を作るわけではなく、何かが道を作っているのでは?」という疑問が出てくるのは、もったもだと思います。ただ、その「何か」がわからないまま、過ごしてきたからなのかもしれません。

私たちの歩みの中では、時には「どの道を歩んだらよいのか」、悩んだり、迷ってしまったりすることもあります。また「こう歩みなさい」と言われても、ついつい反発してしまうこともあります。しかし聖書は「さまざまな道に立って、眺めよ。昔からの道に問いかけてみよ／どれが、幸いに至る道か、と。その道を歩み、魂に安らぎを得よ。」と語ります。

まずは焦ることなく、「さまざまな道に立って眺めてみなさい」、その次に「昔からの道に〈どれが幸いに至る道なのか〉と問いかけてみなさい」、そしてその結果、示された「道を歩みなさい」と。そうすると、「魂に安らぎを得る」と語っています。

ただ、一つ忘れてはいけないのは、「さまざまな道に」という部分、つまり「私たちの前にはさまざまな道が備えられている」ということです。その道は誰が備えているのでしょうか。答えは神です。神が私たち一人ひとりに道を準備してくださっています。その道を信頼して歩むこと、それこそが「魂に安らぎを得る」ことになるのではないのでしょうか。

これからも「さまざまな道に立つ」、つまり道の分かれ目、岐路に立つことが多々あることと思います。時には「人生の分かれ道」、「人生の岐路」に立つこともあるでしょう。そのような時にも神が私たち一人ひとりに道を準備してくださっています。私たちの背後にあって常に守り、支えてくださる神。そのような神によって建てられたのがこの清教学園なのです。

みなさんにも神の御守りがあるように祈ります。

初めからのことを思い出すな。昔のことを思いめぐらすな。
見よ、新しいことをわたしは行う。今や、それは芽生えている。
あなたたちはそれを悟らないのか。
わたしは荒れ野に道を敷き 砂漠に大河を流れさせる。

(イザヤ書43章18節、19節)

コロナに明けコロナに暮れた2020年が終わり、新しい年を迎えました。微小なウィルスが、これほどまでに大きく私たちの生活を変えると誰が想像し得たでしょう。

聖書の中では、荒れ野や砂漠は厳しい不毛の環境であり、人生の苦難や試練を象徴するものとして使われることが多くあります。コロナ禍の2020年は、多くの人たちにとって、まさに荒れ野や砂漠を通るような苦難の年であったのではないのでしょうか。

アメリカの起業家であり、作家、芸術家としても活躍しておられるルース・チョウ・シモンズ (Ruth Chou Simons) 氏が、幼い頃の経験を記しておられます (Our Daily Bread 2020 September to November)。ニューメキシコ州で過ごした子ども時代、お父さんに連れられて家族でドライブに出かける折、車が砂漠を通して走る間、目を閉じて眠るようにしていたそうです。果てしなく続く荒野、乾いた灼熱の不毛の大地。シモンズ氏にとって、砂漠はできれば避けたい場所、そこにいることを実感したくない場所であったそうです。

人生においても、砂漠のような、苦しく不毛に思える時期は訪れます。しかし、人生においては、眠っていてそれを見ないようにすることはできません。心傷つく人間関係、苛立たしい状況、終わりの見えない困難。コロナ禍の今、砂漠のような状況を経験させられている人はたくさんいるのではないのでしょうか。

しかし、冒頭の聖書箇所に記載されている通り、神様は「荒れ野に道を敷き 砂漠に大河を流れさせる」と約束してくださっています。道のない荒れ野に、私たちが安全に歩ける道を造り、水のない砂漠に、豊富な水を湛えた大きな川を流れさせる、と約束してくださっているのです。

シモンズ氏は、幼い頃の経験から、ちゃんと目を開いていれば、実際には砂漠にも美しい景色が広がっている、と語っておられます。人生の砂漠においてもそうである、だから、目を閉じないで、と。

目を閉ざすまでは行かなくても、苦しい時には、その苦しみにしか目が行かず、それがいつまでも続くかのように錯覚してしまうのが私たち人間の弱さです。試練や困難の真只中にも与えられる喜びや希望に目を留めて感謝しつつ、試練の先に備えられている大きな祝福を待ち望んで、この困難な時期を過ごして行きたいものです。

先の見通せないこの時期に、大切な受験期を迎える皆さんは、不安でいっぱいだろうと思います。私は毎年、生徒の進路開拓のために祈っています。その祈りは、難関大学にたくさんの生徒が合格するように、という祈りではなく、一人ひとりにとって最も相応しい進路が開かれるように、という祈りです。確かに、進学実績が上がれば、進学校として学校の評価は上がります。また、より上のレベルを目指すという向上心は、生徒にとって大切なものです。しかし、清教学園は、一人ひとりの賜物を生かすことを校是としています。難関大学に進学して学ぶことよりも、その生徒の賜物をもっと生かされる道があるならば、その進路が開かれるようにと祈ります。一人ひとりの生徒が、生き生きと100%の自分を生きることのできる人生を歩んでくれることが清教学園の願いであるからです。

本校を目指して受験勉強に励んでくださっている小・中学生の皆さんのためにも祈ります。不安定な状況が続く時期、勉強に集中することはたいへんだろうと思いますが、健康に留意し、与えられた環境の中で、その日その日にできることにベストを尽くして頑張ってください。本校に入学し、本校で学ぶことで、最も輝くことのできる、そんな人たちが選ばれて本校の生徒となり、共に充実した学園生活を送ることができるよう、心から祈っています。

「2020年のクリスマスの意味」

理事長・チャプレン 井上 良作

光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。

(ヨハネによる福音書1章5節)

キリスト教徒が多くない私たちの日本でも、12月24日をクリスマス・イブ、25日をクリスマスとして楽しみに過ごすことが定着しています。商業的には街中は、25日になるとクリスマスの飾り付けをすぐに片付け、お正月商戦へと一晩で一変します。

キリスト教会ではクリスマスをイエス・キリストの誕生日ではなく、誕生をお祝いする日として記念します。いつ頃からこの祝祭の習慣が始まったかという、紀元4世紀のローマ帝国時代に行われた教会の重要な会議で12月25日をクリスマスの祝祭日として定めたとされています。キリスト教が最初に広まった北半球においては、毎年夏至が過ぎると冬至に至るまで一日一日と日照時間が短くなり冬へと近づいていきます。私たちは日に日に暗くなっていくこの間、寒さや寂しさ、生きることの辛さをより強く感じます。そして、一年で最も日が短い冬至を過ぎると、少しずつ少しずつ日が長くなり、太陽の復活、命の再生に向かって進んでいるように感じるものだと思います。ローマ時代の教会の人々は、救い主イエス・キリストの誕生をお祝いするのに最適な日はいつだろうかと考えて、この太陽が甦る時節をその時と定めたのでした。なぜなら、イエス・キリストは「世の光」としてこの世に来られたと聖書に書かれているからです。

2020年は新型コロナウイルスに世界中が支配されたような一年でした。亡くなられた方々、愛する人を失われた方々には心よりお悔やみを申し上げるほかありません。また、現在もウイルスと闘っておられる方々のために声援を、医療現場や保健行政に携わる方々には感謝と祈りを贈らせていただきたいと思います。春先の感染拡大から始まった全国の緊急事態宣言による学校休校は、児童・生徒・先生・ご家庭の皆にとって本当に大変なものでした。先の見えない暗闇に閉じ込められたような感覚がとても辛かったですね。けれども、みんな本当によくがんばったのです。完全にと言えるのはいつかはまだ分かりませんが、私たちは確実にこれを克服しようとしているのです。

このような暗闇に閉ざされた一年でしたが、そうであるからこそ、今年のクリスマスをよりいっそう深い喜びをもってお祝いしたいと私は考えます。『光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかった。』一日の中で最も暗いのは夜明け前であり、冬至の後には光が増していく嬉しさがあります。暗さが深いほど光の輝きはより鮮明になります。イエス・キリストは光としてすべての人の心を照らすために世に来られました。すべての人が神様に愛されている子であることを知らせ、人間の罪と死の問題を解決し、歴史の終わりは破滅ではなく完成と希望の時であることを証しするために私たちの世に来られたのです。「暗闇は光を理解しない」とは、この光は暗闇に飲み込まれたり支配されたりすることはない、という意味です。私たちに与えられている光は、空しさや失望や閉塞に負けることはないのです。

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。

独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。(ヨハネによる福音書3章16節)

クリスマスの真実は思いもかけないような素晴らしい希望の光、神様からのプレゼントなのです。どうぞ今年のクリスマスがこの光に気づき心温まる時でありますようにお祈りいたします。